

身体加工と化粧に関する、日本及び英語圏における文化表象の分析

お茶の水女子大学大学院博士後期課程

英 美由紀

Based on the view that the body is an intersecting site for power relations in society such as gender and race, this research focuses on Asian women's bodies on which beauty practices, particularly cosmetic surgery, one of the most typical modern example, are performed. This present report overviews the related theories: while some look at these bodies as a reflection of asymmetrical racial power relations, the others explore the possibility of the subversion of the dominant power structure. An introduction to these critical theories in the West in this report aims to share theoretical knowledge and activate discussions on this issue in Japan.

本研究は(1)身体加工や化粧を論ずるための理論枠組の整理、(2)日本及び英語圏における表象作品の分析を目的とするものである。研究期間は2年であり、初年度の研究はジェンダーを主眼としながら、これらの美容行為が歴史的に特定のジェンダー、すなわち女性に関連づけられるようになった経緯や、この問題について活発な議論がなされてきた英語圏の理論動向の概略を示した。社会・文化的構築物とみなされる身体は種々の実践を通じ、既存の諸規範や構造を上書きする一方、それらを揺るがし、再構築する潜在的な可能性も有するという思潮を背景に、これまで(とりわけフェミニズムの文脈で)否定的に捉えられてきた女性の美容行為の意味づけに一部変化が生じているためである。

美容行為は当初ジェンダーの観点から問題化されることが多かったが、それがこの問題の唯一の分析軸でないことは言うまでもない。例えばアメリカでは美容外科における有色人患者の割合が増加傾向にあることが指摘され、2007年には全美容外科手術件数の約4分の1にのぼった——ヒスパニック系、アフリカ系患者は前年比各8%、アジア系患者は同26%の増加——とされるが¹⁾、この点に着目し新たに人種の視点を導入することも可能となる。しかしこれまでの美容外科に関するフェミニストの議論は人種の観点を欠いており、また人種に言及した場合であっても、その扱いは疑問の余地を残すものであったとクレシダ・J・ヘイズ(Cressida J. Heyes)は指摘する。ヘイズがとりわけ再考の必要性を訴えるのは、アジア人系アメリカ人の美容外科手術を批判的に考察したユーゲニア・コー(Eugenia Kaw)の論考である。コーはアジア人的な身体的特徴を外

科的に消去するような手術は、白人的な美の基準にもとづいた身体規範の(再)生産であるとした。それに対し、身体行為を通じた人種の規範や権力関係の攪乱という潜在的可能性も看過されるべきではないとするのが、ヘイズの主張である。

美容行為をめぐる以上のような議論が提出されてきていることから、今年度はアジア人の美容外科手術に焦点を当てたコーとヘイズの議論を中心に、人種の文脈においても近年理論枠組が変化しつつあることを概観した。また従来は欧米の強力な影響のもとに形成されたと考えられがちであった現代日本の美の規範を、より双方向的な、複雑な様相をはらむものとして捉え直したローラ・ミラー(Laura Miller)の研究にも着目した。さらにこうした理論動向が日本の文化表象テキストにも反映されていることを考察した。

1. 美容行為における人種の議論

自身が編著者の1人である本の中の1章、“All Cosmetic Surgery is ‘Ethnic’: Asian Eyelids, Feminist Indignation, and the Politics of Whiteness”において、これまでのフェミニストによる身体政治の分析を、「詳細に論じることなしに人種に言及している」として批判したヘイズは²⁾、その例としてエリザベス・ハイケン(Elizabeth Haiken)やアン・バルサモ(Ann Balsamo)の名を挙げている。前者は20世紀アメリカにおける美容外科の発展をたどった*Venus Envy: A History of Cosmetic Surgery*中の1章で人種問題を取り上げ、アメリカで理想とされる身体美が白人、とりわけアングロサクソンや北欧系のそれであると述べている³⁾。しかしヘイズによれば、ハイケンの著作も「現代世界の倫理的・政治的複雑さよりも、構造的な全体像」を示したに過ぎない⁴⁾。また*Technologies of the Gendered Body: Reading Cyborg Women*を著した後者も、美容外科医が参照するテキストに掲載されているのが白人女性である事実などには触れているが⁵⁾、人種の問題に深く踏み込むことはしていない。



The Representation of Cosmetic Surgery and Makeup in Japan and Anglo-American Countries: An Analysis from a Cultural Perspective

Miyuki Hanabusa

Postgraduate School of Ochanomizu University

一方、分析の軸足を全面的に人種に置いた研究も少数は存在する。サンダー・L・ギルマン (Sander L. Gilman) による美容外科の文化史、*Making the Body Beautiful: A Cultural History of Aesthetic Surgery*はその代表的な例である。彼は典型的な西欧美が支配的規範となっている状況においては、美容外科手術の基本的な動機は「『人種的』差異のしるしと見られる個所を修正すること」、言い換えれば「『白人として通用し』ようとする欲望」であるという⁶⁾。同書はユダヤ人をはじめとする人種の少数者の手術を扱い、日本の美容外科の発展についても一定の紙面を割いている。しかしギルマンの研究は「人文学的・歴史的的理解に非常に重要」ではあるものの、「ジェンダーがいかにこうした現象を構造化しているかについての扱いは表層的、説明的な域を出ない」として、ヘイズによりその功罪が指摘されている⁷⁾。

2. コーと後継者たち——その問題点

ヘイズはフェミニストの美容外科の文献における人種への問題意識の希薄さとともに、その扱い方についても疑問を表明しているが、その代表として取り上げられるのがコーである。コーの1993年の論文“Medicalization of Racial Features: Asian-American Women and Cosmetic Surgery”は、そのテーマの希少性——アジア系アメリカ人に焦点をあてた美容外科研究——と、後にデータを更新してオックスフォード大学出版局発行の論文集*The Politics of Women's Bodies: Sexuality, Appearance and Behavior*に収められ版を重ねたことから、「最も広範に引用される、人種性の消去としての美容外科手術に関するフェミニストのテキスト」として⁸⁾、その影響力が長く続いた。

コーの論文はまず、1999年にアジア系アメリカ人が全美容外科患者（顔面の施術）に占めた割合が全米における住民の比率を2%上回る6%であり、その施術箇所も特定であった——白人女性が手術により変えようとする箇所が人種的なアイデンティティを示す従来の指標とは基本的に一致しないのに対し、アジア系アメリカ人の場合は、「小さくて細い目」や「低い鼻」などそうした指標と一致した——事実を挙げる。（2007年の北米においてもアジア系患者に最も人気のある手術は重瞼術、整鼻術、豊胸であったことは、依然としてこの傾向に変化がないことを伝えている⁹⁾。）そしてここに人種的マイノリティに独自の身体観、つまりこうした集団の成員は支配的な文化によって形成された身体イメージを内在化することで、「自身の身体部分を嫌悪し、傷つけ、修正する」ものであることを指摘する。言い換えればアジア系住民が手術により達成しようとする美の基準は、「人種イデオロギーに誘導されている」というのである¹⁰⁾。コーの議論は身体を媒介とした個人と社会構造の関係を共謀として捉え、前者の后者への能動的な

働きかけの余地を想定しないものと言えるが、この「コー・モデル」は続く研究者たちにも長く受け継がれていくことになる。

3. 理論枠組のシフト

コーに代表されるようなフェミニストによる人種の議論の問題は、近年の思潮で女性の美容外科手術がエンパワメントの手段として賞賛されるようになっていくこととの間の「ダブルスタンダード」にあると、ヘイズは言う¹¹⁾。すなわち白人女性の手術に想定される規範や権力秩序への抵抗や攪乱の契機が、有色人女性には想定されていないというのである。

ヘイズ自身も言及しているように、このような主張はキャシー・デイヴィス (Kathy Davis) によってもなされてきた。デイヴィスの2003年の著作*Dubious Equalities and Embodied Difference: Cultural Studies on Cosmetic Surgery*には、人種的マイノリティの手術が通常「白人の美容外科手術ほどには正当化のための言説空間を持たない」ことに対する疑問が呈されている。白人の手術にはエンパワメントの契機が模索される一方、人種の特徴を消去するような手術は「『内在化された人種主義』の徴候か、抑圧的な外見の規範との背信的な共謀」とみなされるというのである。しかしこのような手術は、「人種的なアイデンティティの徹底的な拒絶」に還元されるのではなく、「体制に抵抗する方法」として模索されるべきだというのがデイヴィスの主張である¹²⁾。

同様の観点から、フェミニストの人種に関する美容外科の文献は「『個人の行為の構造的な過剰決定』に陥っている」とするヘイズも、「女性の共謀、抵抗、受動性、エイジェンシーのより精緻な分析」の必要性を説く。そして「人種の少数者による美容外科手術の典型」であり、「最も多く議論の対象となってきた、政治的に議論の余地を残す現代の・・・施術」であるアジア人の重瞼術に焦点を当てたコーの論考を議論の俎上に載せ、その欠点——少ないインタビュー・データからの普遍化の傾向、内在化された人種差別主義という偏狭な分析による弊害、アプリオリな結論——を指摘するのである¹³⁾。

ヘイズはまた一重瞼や重瞼術がアジア人に特有であるかのようなコーの議論の前提そのものを問い直し、生来二重瞼を有するアジア人は多く存在し、重瞼術はアンチエイジングの目的で白人にも施されるという事実^{エキゾチズム}に注意を喚起する。そもそも目を「アジア人」と「非アジア人」型に、手術を「白人」と人種的マイノリティのそれに類別すること自体、単純な二分法に陥っていることに他ならない。そして必ずしも一方向的ではない美容外科の可能性——例えば異国趣味やエロチシズムの獲得を目的とした、白人による「人種的」身体特性の外科的盗用——を示唆することで、ヘ

イズは従来のアジア人の重瞼術の議論に見られる「典型を超え」ようとするのである¹⁴⁾。

このような見方は日本人の美容行為に関しても提出されている。日本は他のアジア諸国と同様、西欧に多大な影響を受けてきた歴史的・社会的背景を有し、それは理想美の基準にも及ぶことから、しばしば白人的な身体規範との関連から捉えられてきた。しかしミラーは*Beauty Up: Exploring Aesthetics of Modern Japan*において、支配-被支配という定式化された欧米との関係を土台に論じられがちであったエステや化粧品等の日本の美容関連商品・サービスを、「クレオール化 (creolization)」、「混交 (syncretization)」等の概念を用いながら、より相方向的な文脈において捉え直している。これらの概念はミラー自身により、「文化的な相互浸透のプロセスであり、二つ以上の異なった文化が混交し独自の結果を生成するもの」と定義され、日本の美容関連商品やサービスを欧米からの影響とするのは「(白人の側からの) 自民族中心的な態度」であり、明治期の美のイデオロギーへの変化さえ「必ずしも欧米のスタイルの単純な模倣とはいえない」と言う。とりわけ1990年代初頭以降の日本における美しさのタイプの拡がりには、「人種の純粋さや同質性といった理想の拒絶」や「人種的盗用」などの様々な意味を見出すことができるとして、エンパワメントとしての意義を強調している¹⁵⁾。

4. 日本のテキストにおける美容外科表象

日本における美容外科の発達は比較的遅く、標榜科として認可されたのはようやく1978年になってのことである。しかし1990年代に入ると美容外科クリニックの数は倍増し¹⁶⁾、2000年頃にはかつて9対1だった再建手術と美容手術の割合が逆転した¹⁷⁾。また患者の低年齢化の傾向も指摘されるようになっている¹⁸⁾。

このような状況にあって、美容外科は様々な表象テキストでも主題として取り上げられるようになった。それについてはこれまでも拙論“Reading Dual Meanings of Power on Young Women’s Bodies: The Representation of Cosmetic Surgery in Japanese Manga”などで考察している。男-女のみならず、白人-有色人という二項対立的な構図においても、その各一方のみが医療対象と関連づけられてきた文化言説を問い直すと同時に、美容外科手術が施される若い女性登場人物の身体に従来の人種にまつわる規範や秩序の攪乱の契機が見出されることを検証したものである¹⁹⁾。

(引用文献)

- 1) Heyes CJ, Jones M, : *Cosmetic Surgery: a feminist primer*, Ashgate, Farnham and Burlington, 2009, 4.
- 2) Heyes CJ, : All cosmetic surgery is “ethnic” : Asian eyelids, feminist indignation, and the politics of whiteness, In : Heyes CJ, Jones M (eds): *Cosmetic surgery: a feminist primer*, Ashgate, Farnham and Burlington, 2009, 193.
- 3) Haiken E, : *Venus envy: a history of cosmetic surgery*, The John Hopkins University Press, Baltimore, 1997, 175-227.
- 4) Heyes, 193.
- 5) Balsamo A, : *Technologies of the gendered body: reading cyborg women*, Duke University Press, Durham and London, 1996, 59-61.
- 6) Gilman SL, : *Making the body beautiful: a cultural history of aesthetic surgery*, Princeton University Press, Princeton and Oxford, 1999, xvii-xviii.
- 7) Heyes, 192.
- 8) Heyes, 194.
- 9) Heyes, 201.
- 10) Kaw E, : Medicalization of racial features: Asian-American women and cosmetic surgery, In : Weitz R (ed): *The politics of women’s bodies: sexuality, appearance and behaviour*, 2nd ED, Oxford University Press, Oxford, 2002, 185, 189.
- 11) Heyes, 192.
- 12) Davis K, : *Dubious equalities and embodied differences: cultural studies on cosmetic surgery*, Rowan and Littlefield Publishers, Lunham, 2003, 94, 101.
- 13) Heyes, 193.
- 14) Heyes, 200-201.
- 15) Miller L, : *Beauty up: exploring aesthetics of modern Japan*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 2006, 3-5, 23, 26, 32, 204.
- 16) 石井政之, : 肉体不平等, 平凡社新書, 2003, 151頁. 山下柚実, : 美容整形—「美しさ」から「変身」へ, 文藝春秋, 2001, 262頁.
- 17) 塩谷信幸, : 美容外科の真実, 講談社, 2000, 12頁.
- 18) Gilman, 101-102.
- 19) Hanabusa M, : Reading dual meanings of power on young women’s bodies: the representation of cosmetic surgery in Japanese manga, In : *International research in children’s literature*, 1, 1, 2008: 82-98.